

マックス・シェーラーにおける「自己愛」と「他者への愛」の等根源性 Die Gleichursprünglichkeit von "Selbstliebe" und "Fremdliebe" bei Max Scheler

渡辺 朱音

Akane Watanabe

要旨

本論文は、シェーラーにおける「自己愛」と「他者への愛」の等根源性の内実およびその実践可能性を、彼の価値論との関連において明らかにするものである。本発表の目的は、以下の二点である。第一に、愛と価値把握との関係を検討することで、自己愛と他者愛の等根源性の内実を示すことである。そのために、シェーラーが論じる「自己愛」と「利己主義」における価値把握の本質的相違に着目し、自己の真正な価値把握のあり方について検討する。それにより、自己愛と他者愛の等根源性の内実が、自己と他者の等価値性の把握であることを明らかにする。第二の目的は、真正な価値把握を阻害する要因を検討することで、自己と他者を同じように愛することの実践可能性を考察することである。そのために、等根源的な自己愛と他者愛とが私たちに実践可能であるためには、利己主義的な価値把握の克服が必要であることを指摘し、その克服過程の内実を明らかにする。それにより、自己と他者の実在性に関する錯覚の克服と、それぞれが同じく人間として生きていることの把握を、等根源的な自己愛と他者愛の実践可能性をひらくものとして位置づける。

はじめに

マックス・シェーラーは、『同情の本質と諸形式』（1913/1923）第二部において、「他者への愛 *Fremdliebe* には自己愛 *Selbstliebe* が、他者への憎しみには自己憎が、等根源的に *gleichursprünglich* 対応している」（GW7, 153）と述べている。自己愛と他者愛が等根源的であるということは、私たちは自己を愛せるから他者を愛することができるというわけではないし、その逆も然りということである。また、自己愛と他者愛が等根源的であるということは、私たちは自己を愛するならば同じく他者を愛することができるし、その逆も然りということである。しかし、私たちの実際の生活を見てみると、このような言説は、とくにその実践可能性は自明ではないように思われる。自己愛と他者愛の等根源性というテーゼの実践可能性を理解するためには、まずシェーラーにとっての「愛すること」そして「自己愛」¹の内実を明らかにしなければならないだろう。

¹ Schmidt (2024) は、シェーラーにおける自己愛は、謙遜さや本論文でも取り上げる自己中心主義と密接に関連した概念であることを指摘し、自己愛についての論究こそが、シェーラーの人格主義的倫理学の展開にとって重要な方法であることを示している。(Schmidt, 2024: 503)

本論文は、シェーラーにおける「自己愛」と「他者への愛」の等根源性²の内実およびその実践可能性を、彼の価値論との関連において明らかにするものである。本論文の目的は、以下の二点である。第一に、愛と価値把握との関係を検討することで、自己愛と他者愛の等根源性の内実を示すことである。そのために、シェーラーが論じる「自己愛」と「利己主義 Egoismus」における価値把握の本質的相違に着目し、自己と他者の等価値性の真正な把握を、自己愛と他者愛の等根源性の具体的な内実として位置付ける。第二の目的は、真正な価値把握を阻害する要因を検討することで、自己と他者を同じように愛することの実践可能性を考察することである。そのために、等根源的な自己愛と他者愛とが私たちに実践可能であるためには利己主義的な価値把握の克服が必要であることを指摘し、その克服過程の内実を明らかにする³。

本論文の構成は以下の通りである。第一節では、シェーラーにおける「愛」の規定を価値論との関係を中心に検討し、愛が価値を持つ諸対象および人格とかわる志向運動であることを確認する。それにより、愛において、愛される価値を担う対象が自己か他者かということは問題にならないことを示し、自己愛と他者愛の等根源性が自己と他者の等価値性を前提としていることを明らかにする。第二節では、自己愛および利己主義と自己の価値把握との関連に着目することで、自己と他者の等価値性の真正な把握が、等根源的な自己愛と他者愛の内実であるという解釈を提示する。そして、利己主義および利他主義と愛との区別を検討することで、利己主義・利他主義においては価値認識に錯覚が起きていることを示す。第三節では、利己主義的な価値把握の錯覚の根底にある「自己中心主義 Egozentrismus」の内実を検討し、利己主義の克服には自己と他者の実在性に関する幻想の廃棄が求められることを確認する。それにより、自己と他者の等価値性の把握、すなわち自己愛と他者愛の等根源性の実践可能性は、自己と他者とを生きた人間として捉えることによってひらかれるものであると結論づける。

² 浅野 (2006) は、自己愛と他者愛 (隣人愛) の等根源性の根拠を、その両者がともに神への愛から発するものであるという点に求めている。本論文はその解釈と対立するものではなく、神への愛を基盤とする自己愛および他者愛の等根源性の内実を、シェーラーの価値論との関連において現象学的に検討するものとして位置づけられる。

³ 岩谷 (2023) は、利己主義の克服によって変容した「真正な自己愛」の主体を、シェーラーにおける「倫理的に価値ある人格」としての可能性を持った人間存在であると論じている。本論文は、利己主義と自己愛との本質的な区別および利己主義の主体から自己愛の主体への変容に着目する点で、岩谷と基本的な関心を共有している。しかし、本論文の目的は、倫理的主体の内実の解明ではなく、あくまでも自己を愛することと他者を愛することがシェーラーの議論においていかにつながりうるかを示すことである。

1. シェーラーにおける愛⁴と価値：自己愛と他者愛の等根源性の前提

フッサールの影響を強く受けた中期シェーラーの重要な功績は、カントの形式的倫理学に対して、現象学的方法で直観した情緒的生に固有の秩序と法則性とに基づく、実質的価値倫理学を構想したことである。シェーラーの思想の中心を占める情緒的生の諸現象や諸作用のなかで、彼が特に重視し、根源的作用として位置づけたものが「愛」である。Furstner（1957）が指摘するように、概念的に定義できるものではなく、直観することしかできない愛の本質を、シェーラーは現象学的本質直観という方法によって記述し論究した⁵。シェーラーにとって愛とは、「作用の究極的な本質としてただ直観されうる」（GW7, 155）ものであると言われる。愛は単なる感情や事実の複合に還元することのできない作用であるため、私たちは愛の作用そのものを対象的に知解することも感得することもできないのである。

本節では、シェーラーにおける愛と価値との関係に焦点を当て、彼が行った愛についての現象学的分析を検討する。それにより、自己愛と他者愛の等根源性が、自己と他者の等価値性を前提としていることを示す。

先にも述べた通り、シェーラーが看取するところの愛とは情緒的生の作用である。さらに、シェーラーにとって愛は「原作用 Urakt」（GW10, 356）と規定されており、私たちのあらゆる認識や意欲の前提となるものである。Vacek（1982）は、シェーラーにおける愛を対象との関係を生み出す志向性の運動や、愛する者と愛される者との相互的な関係を生み出す作用であると整理し、それらは愛の作用の創造性であると論じている⁶。シェーラーにおける愛とは、すでにある関係のなかで生じる感情や行為とは異なり、愛する対象との関係そのものをつくりあげる作用である。愛はつねに、愛する主体と愛される対象の関係をつくりだし、愛される対象に対する認識や意欲を主体のうちに呼び覚ます。しかしここで留意すべきは、愛そのものは認識作用ではないということである。

愛と憎しみは、一方ではやはり価値認識を基底づける（のちに示されるように）かもしれないが、しかし価値認識ではない。さらに、愛と憎しみの志向が向かう先は、私たちが他の価値よりもある価値を「先取する *vorziehen*」場合のような、価値ある

⁴ シェーラーが論じた愛の内実については、すでに多くの先行研究がある。Dilworth（1960）はシェーラーにおける愛の創造性を肯定的に評価し、愛についての本質洞察こそが、生命の哲学と精神の形而上学を結びつける試みであり、シェーラー思想の各時期に通底する連続性であると指摘している（Dilworth, 1960: 17f.）。

McGill（1942）は、シェーラーにおける人格主義、本質主義、共同体主義の問題点を指摘し、彼の愛の規定は個人のレベルでの具体的な諸問題を捨象することで成り立つ抽象的で理想的なものであり、フェシズムを擁護する理論であると厳しく批判している。

⁵ Furstner, H., 1957, “Schelers Philosophie der Liebe”, *Studia Philosophica*, 17, S.23.

⁶ Edward V. Vacek, 1982, “Scheler’s Phenomenology of Love.” *The Journal of Religion*, vol. 62, no. 2, pp. 156–177. 当該研究では、シェーラーにおける愛の内実を①対象との関係を生み出す志向性の運動、②対象を変化させる作用、③主体における変化（自己超越）を可能にする作用、④愛する者と愛される者とを結びつけて相互的な連帯関係を生み出す作用の四つに分類している。本文中では論点の整理のためにそのうち二点のみを抜き出したが、この四つの作用はすべて愛の創造性の具体的な内容である。

いは「より高い」価値そのものではなく、むしろそれらが価値を持つかぎりでの諸対象である。私は価値を「愛する」のではなく、価値を持つ何ものかをつねに「愛する」のである。 (GW7, 151)

ここで重要なのは次の二点である。第一に、愛は対象の表象や実在ではなく、その価値と根源的に関わる作用であるということだ。愛は認識作用でも、すでに認識された価値に向けられる作用でもなく、価値認識の基盤となる志向性である。したがって、愛とは「価値内容そのものへの完全に根源的かつ直接的な情緒的態度のあり方」(GW7, 152)である。愛するためには、愛される対象についての価値判断はまったく不必要なのであり、さらに、愛においては、価値判断のために必要な主体と対象のあいだの距離すらも存在しないのである。

第二に、私たちが愛するものは単に価値そのものではなく、価値を持つ何ものかであるということだ。「価値を持つ何ものか」とは、「価値を持つかぎりでの諸対象」である。また、この引用では明示されていないが、シェーラーは価値を担うものとして「人格」を挙げている (GW7, 167)。つまり、価値認識や知覚的認識の諸作用は、価値を持つ諸対象あるいは人格が愛の作用によって志向されることによってはじめて始動するのである。

では、価値内容および価値を持つ諸対象や人格に対する根源的・直接的な情緒的態度様式としての愛は、どのような仕方でそれらと関わるのだろうか。シェーラーは、愛の作用と価値との本質的関連について、「愛はむしろ志向的な運動 intentional Bewegung であり、そのなかである対象に与えられた価値Aから、その対象のより高い価値の現出が現実化する」(GW7, 156)と述べている。このことは、何らかの対象が高い(あるいは低い)価値を持っているから愛することとも、愛が対象のより高い価値をつくりあげることとも異なっている。むしろ、愛する主体にも愛される対象にも知られていなかったような「その対象あるいは人格のより高い価値が、その時々〔愛の〕運動のなかではじめてきらめきでくる zu Aufblitzen kommen」(GW7, 155)のである。愛は、対象や人格に経験的に与えられている価値だけでなく、経験的には含まれてはいないが可能的な、より高い価値に向かっていく運動である。そのより高い価値が他の作用によってあらかじめ与えられることは決してなく、ただその対象や人格を愛する運動のなかではじめて開示される⁷。したがって、愛の運動のなかで志向される対象は、その時点で積極的性質として与えられている価値と、まだ積極的性質としては与えられていないより高い価値の可能性を同時に含むひとつのものとして把握されるのである。

⁷ たとえば、ヨハネによる福音書 8 章 1~11 節で、姦通の罪を犯した女はイエスによって愛を受け、罪を赦された。その際イエスは「あなたがもう罪を犯すことがないと約束するならあなたを赦そう」と言ったのではなく、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と言ったのである。女が罪を犯さず清く生きるという、より高い価値が現出したゆえにイエスは女を愛し、赦したのではない。イエスはまだ経験的にあらわれてはいないが女のなかにあるより高い価値(罪を犯さずに清く生きることができるということ)を、まさに愛のなかで開示したのである。

ここまで、シェーラーにおける愛の規定について検討し、愛はあらゆる認識や意欲の根源となる主体と対象の原初的な関係をつくりだし、価値を持つ対象や人格のより高い価値を開示させる志向運動であることを確認してきた。ここで、愛と価値との本質的連関によって、自己愛と他者愛の等根源性の理論的枠組みを示すことができる。それは、愛とは「第一に価値と（それが担う価値によって透明に貫かれている）対象へと向かう」（GW7, 153）ものであり、その対象の性質や存在様式、価値内容に依存することはないということである。したがって、その価値を担う対象が自分自身であるか他者であるかは、愛の作用および愛する主体にとっての原理的な問題になることがない。

さらに、この理論的枠組みの確認によって、自己愛と他者愛についてのシェーラーの思想的前提が導出される。それは、価値を担うのが誰であるかは問題にならないような或る価値を、自己と他者は同様に持っているということだ。すなわち、シェーラーは自己と他者の等価値性を前提としているからこそ、自己愛と他者愛の等根源性を主張することができたのだと言える。次節以降では、この等価値性を把握することと愛との関係を詳しく検討していく。

ところで、愛はより高い価値に向かう運動であり、価値を持つ諸対象への根源的・直接的な態度様式であった。そしてそのときの態度様式は、「本質的に社会的な *wesentlichen sozialen* 態度様式ではない」（GW7, 153）と言われる。このときにシェーラーが念頭に置いているのは、自己愛と利己主義、および他者愛と利他主義との本質的な区別である。シェーラーにおいて、利己主義および利他主義は社会的態度だとされているが、愛はいずれともかかわりのないものなのである。

次節では、利己主義および利他主義の内実を検討し、そのうちに価値把握の錯覚があることを示す。さらに、自己愛および利己主義の双方における自己認識の差異に着目することで、自己愛と他者愛が等根源的に可能であるとき、自己と他者の等価値性が真正に把握されていることを示す。

2. 愛と「利己主義」および「利他主義」

(1) 自己愛と利己主義⁸

シェーラーは、「〈利己主義〉は〈自己愛〉ではない」（GW7, 154）と明言し、以下のよう
に続ける。

⁸ ここで、シェーラーにおける自己愛と「自愛 *Eigenliebe*」との区別について言及しておきたい。Schmidt (2024)によれば、シェーラーは自愛を愛の墮落した形態であると批判するが、それは自愛には物事にたいする客観的な視点が欠けており、自己と世界についての現実性が失われているからである。自愛の状態において、自己は世界の価値体系から切り離されて孤立している。そして、このような状況を説明する際にシェーラーは「利己主義」という語を使用している (Schmidt, 2024: 525)。したがって、利己主義という語自体がすでに価値論的な意義を含んでおり、シェーラーにおける愛と価値把握の不可分性を示していると言える。

「利己主義」において、愛の対象としての私の個体的自己 *individuelles Selbst*、すべての社会的関係から解放され、たとえば「救済 *Heil*」⁹の概念においてその表現が見出されるような、あの最高の価値様式の担い手 *Träger jener höchsten Wertarten* としてのみ捉えられる個体的自己は、私に与えられない。むしろ私は、努力のなかで単なる「他人のなかのひとり *einer unter anderen*」として私に与えられ、そして、単に他人の価値を単純に「顧慮しない」にすぎないのである。[……]「利己主義」とは、「ただひとりで世界に存在するかのような」態度ではない。反対に利己主義は、社会 *Gesellschaft* の構成要素として個々人が与えられている状態を前提としている。

(GW7, 154f.)

利己主義は、社会の構成要素としての個々人の存在を前提としたうえで、自分を彼らのうちのひとりであるとする意識によって成立するものである。シェーラーによれば、利己主義者にとって本質的な自己認識は、他者に対する関係における自己、つまり「他者よりも多くのものを所有し、獲得しようと努めている自己」である (GW3-b, 82)。それは、他者へ目を向け、他者の所有する諸価値や財に目を向けるという社会的な態度と、それに基づく他者からの要求の無視によって成り立っている (GW7, 155)。反対に愛においては、愛される対象は個体的自己としてみずからに与えられている。利己主義者は社会にいる多くの人々のうちのひとりとしての相対的な価値をみずからに与えるのに対し、自己愛の主体は自己を世界でただひとりの個体的自己として把握し、そのうちに最高の価値を見出すのである。

ここで言われている「最高の価値様式」すなわち個体的自己の価値とは、人間の個別的な「人格的価値」であると考えられる¹⁰。人格とは、「さまざまに異なる本質の諸作用の、具体的でそれ自体本質的な統一存在」(GW2, 382)と規定されている。人格は、さまざまな作用や行為をひとつにまとめあげて統一する、その人に個別的で具体的な作用中心である。すなわち、自己愛と他者愛の等根源性の前提となっている、自己と他者とが等しく担う価値とは、まさにこの個別的な人格的価値であると言える。利己主義と自己愛との区別は、単にその社会性／非社会性という表現にとどまるものではない。それはむしろ、価値の与えられ方の本質的な相違によって隔てられているのである。

利己主義において、自己の人格的価値は社会的自我によってとらわれてしまい、覆い隠されてしまう (GW7, 155)。そこでの自己の価値は絶対的なものではなく単に相対的で偶然なものとして把握され、本来的に個別的な人格的価値そのものを志向することはない。その代

⁹ 最高の価値様式＝人格的価値の担い手としての個体的自己が見出される場面として「救済」が引き合いに出されていることは注目に値する。シェーラーは、遺稿「愛の秩序」(1933)のなかでも、「真の自己愛は、みずからの救済への愛」(GW10, 353)であると述べている。さらに、シェーラーは神の眼で見るように自己を見ることを「謙遜 *Demut*」と呼び、キリスト教的徳の最高のものであると位置づけている (GW3-a, 21)。また、この「謙遜」は、「愛」および「克己 *Selbstbeherrschung*」と並んで、哲学的な本質洞察を可能にする基礎としての道徳的要件のひとつとされている (GW5, 89)。神、あるいは信仰と価値把握の関係については、稿を改めて論じることとしたい。

¹⁰ シェーラーは、「個体的＝人格的な価値本質 *individual-persönliches Wertewesen*」(GW2, 481)として、個体的価値と人格的価値を等置している。

わり、利己主義者は自分と関係するかぎりの、あるいは我有化しうるかぎりのあらゆる事物や他者の価値を志向する（GW7, 155）。言うまでもなく、ここで志向されている他者の価値は、シェーラーが自己愛と他者愛の等根源性の前提としている自己と他者が等しく有する人格的価値とは別のものである。自己の本来の人格的価値を覆い隠してしまう社会的自我をシェーラーは「外皮 Hülle」と呼ぶが、これを脱落させていくのは自己愛に基づく真正な価値把握であり、この価値把握によって私たちはその価値を担う人間を個体的で代替不可能なものとして捉えられるようになる（GW7, 129f.）。

また、「愛の秩序」では、利己主義的態度で生きることによって、自己の本来の能力や力を活用せずに浪費してしまうことが指摘されている（GW10, 353）。なぜなら、利己主義のうちにあっては、私たちは「無知、虚栄心、功名心、高慢で織られた多彩な幻想的錯覚の織物」（GW10, 353）で覆われた目でみずからを、さらに自分の周りのすべてのものを見るからである。それに対して、真の自己愛においては、私たちは精神の目によって「神の眼そのものを通しての〈ように〉」（GW10, 354）みずからを、そして世界を見ることができるといふ。利己主義者が真正な価値把握への目が閉ざされて錯覚の幻想を見ているのに対し、自己愛の主体は精神の眼によって自己および世界の価値を真正に把握することができるのである。

ここで着目すべきは、自己愛の主体は自己の価値を真正に把握することができているということである。すなわち、真正な自己の価値把握とは、自己愛の具体的な内実であると考えられる。また、自己愛と他者愛の等根源性が自己と他者の等価値性を前提としていること（第一節）に照らせば、等根源的な自己愛と他者愛を実践している主体は、自己と他者の価値を同様に真正に把握していると言える。自己と他者の価値の真正な把握とは、言い換えれば自己と他者の等価値性の把握である。したがって、自己と他者の等価値性の真正な把握、つまり自己と他者とが同様に担っている個別的人格的価値を把握することが、等根源的に自己と他者とを愛することの内実であると考えられる。私たちは、価値把握の真正化のプロセスを論究することで、自己と他者とを等根源的に愛することの可能性を考察することができるだろう。

(2) 利他主義における利己主義

ここで価値把握の真正化について検討する前に、利他主義¹¹についても確認しておきたい。私たちは利他主義のなかにも利己主義の別の様相、つまり自己放棄として現れる利己主義を見て取ることができるからである。シェーラーは、「道徳の構造とルサンチマン」（1915）において、利他主義が他者への愛と混同されてきたことを批判し、以下のように言う。

¹¹ シェーラーは、必ずしもすべての利他的行為や利他的態度を批判しているのではない。彼が自己中心主義と関連させているのは、他者愛にみせかけた、しかしその実は愛に基づいていない利他主義的行為や態度である。たとえば、彼はとくに精神疾患において見られるような過剰な自己犠牲をともなう利他的行為や、自己を他者の生に埋没させ同一化してしまう態度を念頭に置いていると思われる。（GW7, 54）

自己自身とその劣等性を見る不安が、すでに「他者」一般としての他者に—その他者の積極的価値のためではなくて、単にそれが「ひとりの他者 *ein anderer*」であり「非自我 *Nichtich*」であるという理由で—献身する *hingeben* ことを駆り立てる。近代哲学用語では、このことは非常に特徴的に「利他主義 *Altruismus*」と呼ばれ、それは愛に代わる多くの近代的代用品の一つである。利他主義では、愛の運動を構成する第一のことは、ある積極的価値の看取、あるいは愛そのものにおいて積極的価値がきらめき出ることではなくて、単に自己自身から目を背けること *Abwendung* であり、他者の事柄に没頭すること *Aufgehen* である。(GW3-b, 81)

ここでシェーラーは、「愛」という語を二重の意味で使用している。それが他者であるというだけの理由で献身する利他主義的な愛は、彼にとって本来の愛とは言えないものであり、それが単に一般的に愛と見做されているというだけである。本論文のこれまでの検討を振り返れば、ここでシェーラーが想定する本来の他者愛が、他者の積極的価値の看取および積極的価値がきらめき出るところの志向的運動のことであり、利他主義とはまったく関係のないものだということは明白である。シェーラーは、愛とかかわりのない利他主義的態度は、単に自分ではない誰かにかかざらうことで自己の生や課題から目をそらしている状態であると指摘し、それを厳しくも「単に自虐 *Selbstfluchen* を飾るための名前」(GW3-b, 81)と呼ぶ。この場合、献身する対象は自分以外であれば誰でもよいのであり、そこでは他者の持つより高い価値への志向と価値把握ははたらいっていない。

以上のような態度は、「共感錯覚の類型」(GW3-b, 82) であると言われる。共感錯覚とは、自己の感情を移入することによって他者の感情を理解し、共感できていると思いつくことである¹²。利他主義によって自己の生から目を転じようとしている人々は、シェーラーによれば自己の生を他者の生に移入し、蒸発させてしまう傾向を持つ。価値把握の観点から言えば、利他主義者は自己の価値を他者の評価や判断に完全に委ねている状態である (GW7, 54)。利他主義においては、自己を社会の構成要素の単なるひとつとしてのみ把握し、他者とかかわるかぎりでの自己の価値を、自己の人格的価値とみなす錯覚が起きていると言える。先に、利己主義においては自己の本来の人格的価値が社会的自我によって捉えられ、覆い隠されてしまっていることを確認した。また、利己主義者は、自己を社会のなかの単なるひとりとして価値把握し、さらに自己に関係しているかぎりでの他者の価値だけを志向していた。利他主義におけるこのような自己価値把握は、利己主義において自己の個体的価値を社会的自我にとらわれている状態と同様である。したがって、ある種の利他主義や献身、自己犠牲のなかにも、利己主義的な価値把握の錯覚を指摘することができる。

¹² シェーラーは、他者の心的なものの理解について、テオドール・リップスの「感情移入説」に一貫して批判的であった。知覚可能な他者の身体表出に自己の身体表出およびそれに結びつけられた感情を移入するという仕方、他者の心的なものの理解を説明しようとする感情移入説は、シェーラーによって誤りとして退けられている。彼は、共感錯覚の理論はすべてこの誤った感情移入説に端を発するという。(GW7, 56f.)

利己主義的および利他主義的な生き方をしているときには、真正な価値把握は錯覚によって阻害されてしまっており、等根源的な自己愛と他者愛の可能性もまた阻害されてしまっている。したがって私たちは、価値把握における利己主義的な錯覚の幻想を克服する様相を描き出すことによって、自己と他者の等価値性の把握のプロセスを明らかにし、自己愛と他者愛の等根源的な実践可能性の方途を解明することができるだろう。次節では、利己主義的な価値把握の錯覚の根底にある「自己中心主義」に焦点を当て、その内実および克服のプロセスを明らかにする。

3. 真正な自己愛に向けて：自己中心主義の克服

(1) 自己中心主義とは何か

前節で示したような利他主義的な価値把握の錯覚の幻想は、はたしてどのようにして生み出されるのだろうか。シェーラーによれば、人間の自然的態度からつくり出された「自己中心主義」こそ、「独我論、利己主義、自体愛 *Autoerotismus* に共通する同一の原因」（GW7, 69）である。自己中心主義とは、シェーラー自身の表現で端的にまとめるならば「みずからの〈環境世界 *Umwelt*〉を〈世界〉そのものだと見なす幻想」（GW7, 69）である。これはどういうことか。

環境世界とは、シェーラーが『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（1913/16）のなかで、生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの影響を受けて¹³使用した概念である。シェーラーは、環境世界を「ある生物に効果を及ぼすものとして体験された世界の総体あるいは統一的全体」（GW2, 168）と定義している。人間およびあらゆる有機体は、自身の生に何らかの影響や効果を及ぼすものとして、自己自身と相関的なものとして環境世界を捉えている。価値を把握しながら生きる存在者である人間にとっての環境世界は、「効果を及ぼすものとして体験された実際的な価値世界」（GW2, 156）と表すことができる。環境世界の価値は、その環境世界を生きる人にとってどのような効果を及ぼすかによって可変的であり、相対的なものである。

環境世界は身体を持った有機体が生きていくために欠かせない相関項である。しかしシェーラーは後期の主著『宇宙における人間の地位』（1928）において、人間の特殊性とは「環境世界から自由 *umweltfrei*」であり「世界開放 *weltoffen*」的な存在者でありうるということだと言う（GW9, 33）。人間は、みずからが生きている環境世界や身体機能・心的機能を対象化する作用を有し、その束縛を超越することができ、そこにこそ人間の特殊な本質が表れるというのだ¹⁴。環境世界や身体等の束縛を超越した先に看取することができるものが、シェ

¹³ 1912年に刊行された「道徳の構造とルサンチマン」の初版（初版の題は「ルサンチマンと道徳的価値判断」）において、ユクスキュルの『動物の環境世界と内的世界』が参照されている。なお、シェーラーがユクスキュルの思想をどのように自身の倫理学・政治学の次元に統合したかについては、Becker（2019）を参照。

¹⁴ 本論文では環境世界からの超越を肯定的に論じているが、Cusinato（2020）のような、シェーラーの環境世界についての議論そのものを知覚論の領域で積極的に受容し発展させる研究も注目に値する。当該研

ーラーのいう「世界」である。先述したようにシェーラーは、人間のあらゆる行為や作用を統一している個別具体的な作用中心を「人格」と呼んでいるが、対象化作用が人格の作用であるかぎり、人格はつねに世界と相関している¹⁵。

ここで、本節冒頭で引用したシェーラーの自己中心主義に対する規定（自己中心主義は自身の環境世界を世界とみなす幻想である）の内実が明らかになる。すなわち、自己中心主義とは、自身の環境世界に束縛されながら、そこで看取された相対的な諸価値を自己の人格が志向する世界の本質的諸価値であると錯覚することである。ここで前節を振り返って、利己主義においては、社会の単なる構成要素のひとつとしての自己価値把握によって、個別的人格としての本来の価値把握が阻害されていたことを思い出そう。これまでの検討によって、以下のことが明らかになるだろう。

利己主義的態度および利他主義的態度において、自分ではない誰かという仕方で把握される他者は、ただ自己の環境世界に存在する相対的な対象のひとつにすぎない。それにもかかわらず、自己中心主義を生きる者から見れば、自身が志向する他者の価値は人格的価値として錯覚されている。さらに、利己主義者は（メタ的に見れば）自己をも自身の環境世界に存在する対象のひとつとして価値把握しているのだが、自己中心主義を生きている利己主義者自身の目からは、それが世界のうちでの本来の自己の人格的価値のように錯覚されているのである。では、このような自己中心主義による価値把握の錯覚を克服するにはどうすればよいのだろうか。

(2) 自己中心主義の克服：実在性の幻想の廃棄

シェーラーは、自己中心主義の表出のひとつである利己主義の克服について以下のように述べる。

まず実在性の幻想 *Realitätsillusion* の根本的な破棄、すなわち、他者に向かって「開いている」心 Herz にはじめて生まれる—このこと自体がおそるべき自己中心主義の破棄によって成立するが—、生命と赤い血による他者の影のような実在 Schattenexistenzen の充実が、実践的な自己中心主義としての利己主義をも取り除くことができるのである。(GW7, 71)

究はシェーラーの環境世界論が、認知科学者 Francisco Javier Varela Garcia (1946-2001) が提唱したエナクティビズム（知覚は環境との相互作用による身体化された活動であるという理論）に寄与することを主張している。また当該研究は、世界と人格の相互作用についてもエナクティビズムの一側面として解釈することで、世界と人格についての理論と知覚論とを接続させる道筋を示唆している点でも重要である。(Cusinato, 2020: 241)

¹⁵ このような相関関係を、シェーラーは以下の五種類に分けている。「世界-人格」、「環境世界-身体 Leib」、「外界 Aussenwelt-自我 Ich」、「死せる物体 toter Körper-物体的身体 Körperleib」、「身体的自我 Leiblich-心 Seele」。

自己中心主義を克服するための重要な手引きとなる操作が、上の引用文の冒頭にある「実在性の幻想の廃棄」である。この幻想は、「影のような実在」と言い換えられている。他者の実在性を影のようなものとみなすこととは、絶対的なものだと思い込まれた自己の実在性に対して、他者を「私たちの存在と自分自身の関心領域にのみ関わっている」（GW7, 70）かぎりでの「現存在に相対的・様存在に相対的な実在 *daseins- und soseinsrelativ Real*」（GW7, 70）だと捉えることである。私たちは第二節において、利己主義者は自己と関係するかぎりでの、あるいは我有化するかぎりでの他者の価値を志向することを確認した。同様に、実在性の幻想のうちでも、絶対的に実在すると考えられているのは自己のみであり、一切の他者は自己に対する使用や支配・享受、すなわち所有の対象でありうるかぎりでの相対的な実在性を持つ。それにもかかわらず、単に自己に関わっているかぎりでの相対的な実在性しか持たない他者は、この錯覚の幻想のうちでは絶対的な実在性として把握されてしまう。また、本来そのときに把握されている自己の実在性も相対的なものであるはずなのだが、自分自身には絶対的なものとして与えられているように思われるのである。

このような実在性の幻想のなかでは、私たちは他者を愛することはできない。実在性の幻想のなかでは、他者の実在性は単に自己の影でしかなく、自己に関係しており所有可能である限りで存立するため、「他者自身のもの」としては把握されていない。それは言い換えれば、他者を所有の対象として自己のうちに取り入れてしまっている状態であって、「隣人の暴力的・情緒的な破棄と無能力宣言 *Entmündigung*」（GW7, 81）なのである。この場合、「他者への愛」という志向運動は成り立たず、そこでの利他的行為は単なる「我欲 *Selbstsucht* の拡大」（GW7, 81）となる。そこで愛のように見える何らかの言動が行われていたとしても、それは利己主義的・利他主義的行為にすぎないのである。

また、このとき他者の価値は明らかに自己と等しいものとしては把握されていないし、他者の実在性をみずからとかかわるかぎりにおいて相対的に認め、対象化してみずからのうちに取り込む絶対的中心という自己価値把握も真正なものとは言い難い。したがって、このときの自己は真正な価値把握を生きる自己愛の主体ではない。自己中心主義による実在性の幻想は、自己愛と他者愛を等根源的に不可能にする態度であり、これを克服することは自己愛と他者愛の等根源的な可能性をひらくことだと言えるだろう。

上の引用文にあるように、自己愛と他者愛を等しく不可能にする、自己中心主義的態度による実在性の幻想を廃棄するためには、他者を「生命と赤い血」に満ちたもの、すなわち「人間として *als Mensch*、生きているものとして *als Lebewesen*」（GW7, 71）把握し、自己と他者の等しい実在性の意識を回復させることが必要である。そして他者を自己と同様に現実に生きているひとりの人間として捉えることを、まさにシェーラーは他者を自己と「等価値 *Gleichwertigkeit* のものとして」（GW7, 70）捉えることであると言うのである。ここで言われている自己と他者の等価値性の把握とは、第二節で確認したような社会の構成要素のひとつとしての相対的な価値把握を廃棄し、自己と他者とがそれぞれ個別的な人格的価値を担う人間であることを真正に把握することであると考えられる。

他者の価値は、彼が自分にとってどのような価値を持つのかによって決まるものではない。同様に自己の価値も、他者の評価や判断で決まるものではない。自己にも他者にもそれぞれの個別的な人格的価値があり、その意味で自己と他者は等価値である。そして、私たちがこれまで検討してきた人格的価値をめぐる錯覚は、自己と他者とが同様に生きた人間であるという気づきにおいて克服されると言える。前節までの検討で明らかにしてきた自己愛と他者愛の等根源性の内実に照らせば、自己と他者とが等しく人間として生きていることの真正な把握こそが、自己と他者とを同様に愛することを可能にする契機となるのである。

おわりに

本論文の目的は、シェーラーにおける自己愛と他者愛の等根源性の内実およびその実践可能性を明らかにすることであった。第一に、自己愛と他者愛の等根源性の内実が、自己と他者の等価値性の把握であることを明らかにした。第二に、自己と他者の実在性に関する錯覚の幻想を克服し、それぞれが同じく人間として生きていることを把握することを、等根源的な自己愛と他者愛の実践可能性をひらくものとして位置づけた。

また、実在性の廃棄が自然的態度の克服のひとつとして位置づけられていたことから、私たちの自然的態度においては、自己と他者が同じく「人間として生きている」という自明に思えるような事実すらも、真正に把握されていないということが逆説的に明らかになったと言える。シェーラーの自己中心主義批判は、私たちが自然的態度においていかに幻想に満ちた曖昧な価値世界を生きているかを照らし出し、それによって起きうる自他関係の問題を克明に描いている。それだけでなく、そのような状態を越えていこうとする人間の精神的成熟のプロセスを記述するものとして、現在を生きる私たちにとって今なお大きな意義を有している。

しかし、本論文で示した結論は、いまだシェーラーの愛についての概念的な解釈にとどまっている。とくに、等根源的な自己愛と他者愛の実践可能性についての、具体的な理論の練り上げが喫緊の課題である。本論文では、自他の実在性の錯覚を廃棄することをその実践可能性の契機として位置づけたが、私たちはさらに、人間の実在性の真正な把握と人格的価値の把握との具体的な関連を明らかにしなければならない。シェーラーは、自己中心主義について論じるなかで「共同感情 *Mitgefühl*」によって実在性の幻想が廃棄されると述べている（GW7, 69）。したがって、自己と他者の等価値性の把握における共同感情の意義について論じ、そのなかで、自他の実在性を正しく把握することが個別的な人格的価値を把握することとどのように結びつくのかを明らかにする必要がある。

凡例

- ・シェーラーの著作は、すべてシェーラー全集（Gesammelte Werke）から引用し、略号 GW の後に巻数，頁数を記載した。
- ・邦訳は筆者によるが、一部の訳出に際しては既訳を参考にさせていただいた。
- ・傍点は原著者の強調である。[] は筆者による補足・省略を示し、下線は筆者による強調を示す。

文献

一次文献

- GW2: Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, in: Gesammelte Werke Bd.2. Francke Bern, 1980. (吉沢伝三郎訳、1976、『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』、『マックス・シェーラー著作集 1』；吉沢伝三郎・岡田紀子訳、1976、『マックス・シェーラー著作集 2』；小倉志祥訳、1980、『マックス・シェーラー著作集 3』、白水社) .
- GW3-a: Zur Rehabilitierung der Tugend, in: Gesammelte Werke Bd.3. Francke Bern, 1972. (林田新二・新畑耕作訳、1977、「徳の復権」、『マックス・シェーラー著作集 4』、白水社) .
- GW3-b: Das Ressentiment im Aufbau der Morale, in: Gesammelte Werke Bd.3. Francke Bern, 1972. (林田新二・新畑耕作訳、1977、「道徳の構造におけるルサンチマン」、『マックス・シェーラー著作集 4』、白水社) .
- GW5: Vom Wesen der Philosophie und der moralischen Bedingung des Philosophischen Erkennens, in: Gesammelte Werke Bd.5. Francke Bern, 1968. (小倉貞秀訳、1977、「哲学の本質と哲学的認識の道徳的制約とについて」、『マックス・シェーラー著作集 6』、白水社) .
- GW7: Wesen und Formen der Sympathie, in: Gesammelte Werke Bd.7. Francke Bern, 1973. (青木茂・小林茂訳、1977、『同情の本質と諸形式』、『マックス・シェーラー著作集 8』、白水社) .
- GW9: Die Stellung des Menschen im Kosmos, in: Gesammelte Werke Bd.9. Francke Bern, 1976. (飯島宗享・亀井裕訳、1977、「宇宙における人間の地位」、『マックス・シェーラー著作集 13』、白水社) .
- GW10: Ordo Amoris, in: Gesammelte Werke Bd.10. Francke Bern, 1986. (平木幸二訳、1978、「愛の秩序」、『マックス・シェーラー著作集 10』、白水社) .

二次文献

- Becker, R., 2019, "How Max Scheler integrates Uexküll's theory of environment", *Jakob von Uexküll and Philosophy: Life, Environments, Anthropology*, Routledge, pp. 73-88.
- Cusinato, G., 2020, "Body enactivism and primordial affectivity. Max Scheler and Jacob von Uexküll's aporia", *THAUMAZEIN*, 8, pp. 226-245.
- Dilworth, David A., 1960, "Max Scheler's Theory of Love", *ETD Collection for Fordham University*.

- Furstner, H., 1957, "Schelers Philosophie der Liebe", *Studia Philosophica*, 17, S. 23-48.
- Frings, M., 1965, *Max Scheler. A concise introduction into the world of a great thinker*, Duquesne University Press.
- McGill, V. J., 1942, "Scheler's Theory of Sympathy and Love.", *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. 2, no. 3, pp. 273-91.
- Schmidt, B., 2024, *Ethik der Selbstliebe: Panorama – Typologie – Konzept*, Verlag Karl Alber.
- Vacek, Edward V., 1982, "Scheler's Phenomenology of Love." *The Journal of Religion*, vol. 62, no. 2, pp. 156-177.
- 浅野貴彦、2006、「人格の成熟—シェーラーの連帯思想の倫理的次元—」、『人文論究』、55(4)、pp. 84-100.
- 岩谷信、2023、『マックス・シェーラーの倫理思想〈倫理的人格の生成と存在〉の視座から』、東北大学出版.
- 畠中和生、2008、「シェーラーの世界概念—人格と世界、身体と環境世界、マイクロコスモスとマクロコスモス—」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』57、49-58.

(わたなべ あかね・筑波大学)